

《抄 訳》

## ドリス・レスリング 『父の思い出』

(訳) 松 村 豊 子\*

### 解 題

『父の思い出』(*My Father*)は『母とわたし、生意気な娘たち』(*Impertinent Daughters*)より20年ほど前の1963年9月1日付『ロンドン・サンデー・テレグラフ』(*London Sunday Telegraph*)に掲載された1回読切りのエッセイである。この頃は『黄金のノート』(*The Golden Notebook*, 1962年)がイギリスに限らず広く欧米で好評を博したためペーパーバックとして再版された時期(1964年出版)と重なる。後に、レスリングは母親や自身についてもエッセイを数多く執筆することになるが、『父の思い出』は一躍時の人となったレスリングが個人生活に対する沈黙を破り、家族を題材に選んだエッセイの第1弾なのである。当時の社会的注目度の高さは翌64年2月15日付『ヴォーグ』誌(*Vogue Magazine*)にこのエッセイの1部抜粋が「内なる炎」(“All Seething Underneath”)と題して掲載されたことから明らかである。フェミニズム運動勃興期の1960年代前半では、後にフェミニズムのバイブルとして高く評価されることになる『黄金のノート』だけでなく、著者である女性作家レスリングに対する興味も尽きなかったのである。

『父の思い出』を読むと、第1次世界大戦と第2次世界大戦という大規模な戦争を2度も体験し

た父親の数奇な生涯に対する飽くなき探求と深い理解が直裁されていることに感嘆せざるをえない。言い換えると、親元から離れ自立し、結婚して子供を育て、生涯を終えるという普通の人生を戦争によって奪われた父親というよりむしろ1人の人間に対する深い愛情と同情心がレスリング文学の根底にあることが明らかになるのである。映画化されて以来、日本でも評判になったレマルク(Erich Maria Remarque, 1898-1970)の『西部戦線異状なし』(*All Quiet on the Western Front*, 1929)では、主人公はレスリングの父親同様に第1次世界大戦に出兵するが、この物語はフィクションであるため、語り手兼主人公は作者だけでなく読者にとっても都合よく戦死する。では、戦中・戦後の世界を生きた現実の人々はどうか。第1次世界大戦時の経験をイギリス女性作家たちが小説という形でどのように書き残したかを研究した『西部戦線異常あり』などを読むと、たとえ直接戦闘に加わらなくても、戦争によって非日常的な世界へ駆り立てられる普通の人々が戦後を生き抜くのがいかに困難であるかが解き明かされる。第1次世界大戦中に精神の安定を失ったイギリスの有名な女性作家ヴァージニア・ウルフ(Virginia Woolf, 1882-1941)も度々ドイツ空軍によるロンドン爆撃について日記に記している。ウルフは「西部戦線」の類の小説には一切関与せず、周知のように「意識の流れ」を積極的に小説の手法に取り入れたブルームズベリー・グループの主要メンバーである。彼女の日記には小説とは異なり、爆撃、徴兵、疎開、物資不足等々の戦争に関係する

\* 江戸川大学 語学教育研究所長、教授

記述が頻繁に見られる。1例を挙げると、次のような文面がある。

1917年10月20日(日曜日)

幸運、でなければ、不運だ、とアリックスなら言うでしょう。彼女はおそらく一晩中ピカデリー界隈をさ迷い歩いていたのではなかったのです。だって、スワン&エドガー店の向かい側の舗道には大きな爆弾が落ちた痕があるから、ぶらぶら歩いていたとしたら、今頃は墓穴に埋められていたことでしょう。後で分かったことだけれど、ドイツの飛行船ツェッペリンがやって来て、1時間か2時間上空を誰にも目撃されずに飛行し去ったのです。わたしたちにはこれ以外のことは何も知らされていません。

散歩に出かけると、手入れが行き届いたよい身なりをした田舎風の男性に郵便ポストのところで出会いました。ウォールターでした——出版予定の図書の洗礼式の代わりに神が遣わされたのでしょうか。それから、彼はわたしたちとずっと何時間も一緒に行動しました。散歩をし、家へ戻ってお茶をし、それから、勧められるままにだらだらと食事をしました。(63-64)

戦時下であることを忘れようとしてか、ウルフはこのように空爆という非日常性を日常生活の1部として受け入れ、自身の日常生活を丹念に日記に綴っている。ウルフが精神を病み、第2次世界大戦勃発後しばらくして入水自殺したことを考えると、彼女が日記で日常生活の正常さを強調すればするほど心理的な矛盾は増幅したようである。レッシングの父親はホーム・フロント(銃後の兵)でなく、愛国心に駆られた志願兵として戦争に赴き、バトル・フロント(激戦地)で戦闘中に片脚を失い、今日で言うところの回復不能なほど激しいシェルショックに陥る。戦後、彼は担当看護婦だった母と結婚し、英領植民地ペルシャ(現イラン)で銀行員として数年間過ごした後、南ローデシア(現ジンバブエ)へ赴き、農場経営に携わる。イギリスが第2次世界大戦に参戦すると、故国をドイツ・ロシアの侵略から守るために、1人息子

を戦争へ送り出す。そして、彼は息子の無事な帰還を知らないまま、故国から遠く離れたアフリカで享年61歳の生涯を終える。

レッシングは父親のバトル・フロントにおける想像を絶する恐怖体験、そして、ホーム・フロントで看護婦として働いた母親の体験をもとに、もう1つの『西部戦線異常あり』を書こうと思えば執筆できたはずである。しかし、レッシングの反戦姿勢はヨーロッパにおける世界大戦よりもむしろ当時暗黒大陸と呼ばれたアフリカにおける白人による黒人に対する搾取・差別撤廃と支配者側の白人の貧しさに対する深い同情に根差しているため、彼女が『西部戦線』云々の類の小説を書くことはないのである。レッシングの視点から見ると、父親の不幸は戦争で片脚を亡くし、その後、糖尿病他の病気を患ったことだけでなく、戦後をイギリス政府の無謀な植民地政策に促され、自負心が人一倍強かったにもかかわらず、アフリカの辺境の地で貧しい移民の1人として暮らしたこともある。『父の思い出』は短いエッセイであるが、戦争に対するレッシングの並々ならない抗議姿勢を解き明かしている点において見逃せない作品である。

『父の思い出』を発表した数年後の1966年にエリザベス・ハウのインタビューに応じて、レッシングはアフリカにおける農場経営の矛盾と白人農家の貧しさについて次のように語っている。

父は白人の生活水準から言うと貧しかった。…ところが、3,000エーカーもの土地を所有していました。1エーカーを10シリングで購入しましたが、この土地はアフリカ人を居留地へ放り出した後の空き地だったのです。…第2次世界大戦後も同じ事が繰り返されていました。わたしが知っている限り、今この時間にも同じことがそこでは繰り返されています。「白人占拠のために土地が明け渡されるのです。」戦争から帰還した白人はその土地を、多分1エーカー5シリングで入手します。白人の農場主はランド銀行から途方もない借金をして、経営に乗り出します。わたしの父は、季節の変化

に応じて40人から60人くらいのアフリカ人を雇いました。成人男性なら1ヶ月12.6シリング、ドルにして1.50を支払いました。雇われたアフリカ人は収容地内にたった1日で小屋を建てました。溝を掘り、丸太を切り出し、丸太の上に泥をのせ、その天辺に藁をふいただけの家で暮らします。下水設備は全然ありません。多くの農場は似たりよったりです。わたしは過去の状況について話しているわけではありません。(83)

ここで興味深いことは、レスリングが父親のアフリカ体験を過去のものとして美化せず、現在も進行中の社会問題として提起していることである。黒人と白人の排他的利害関係をこのようにとらえると、ジンバブエでは現在も依然として暴動や戦争がいつ勃発しても不思議ではないのである。

では、レスリングはどのように父親の絶望や怒りを表現しているのでしょうか。『父の思い出』では、農場経営の破綻に度々直面する父親の激しい人種差別意識や偏狹な愛国心が度々記されているが、彼女はそのような父親の言動を一切批難せず、戦後精一杯生きる元将校の姿としてあるがままに受け入れ、私情を極力まじえず淡々と語っている。農場経営の才に欠けた父親に対する恨みと失望だけは赤裸々に吐露しているが、総じて父親の欠点に関しては母親の場合とは比較にならないほど寛大である。彼女の寛容さの要因の1つとして、壮大なアフリカの大自然を賛美することを父親から学んだことが挙げられる。アフリカ生活は父母にとってまさに生き地獄だったが、レスリングが数多の作品で繰り返し力説するように、娘にとっては何ものにも代えがたい癒しの遺産なのである。「アフリカでは太陽が沈むと、星が昇り、すべての星は想定される行程を光り輝きながら動く」(98)のみに反し、父親の人生は戦争によって本来の行程から大きく外れてしまう。父親への深い愛情と同情心の根源は、過ちを犯す人間と大自然との対照に求められると言っても過言ではないだろう。『父の思い出』ではレスリングの語りの

口調はこのコントラストを見事に表現しているのである。

最後に、アフリカ生活が作家レスリングの原点であることを付け加えて【解題】の結びとする。レスリングが幼少期から敬愛する女性作家の1人に、イギリス人として初めてアフリカ人によるアフリカ人のためのアフリカを提唱したオリブ・シュライナー(Olive Schreiner, 1855-1920)がいる。シュライナーはドイツ人宣教師を父とし、イギリス人を母とする南アフリカ生まれの小説家である。シュライナーの代表作『アフリカ農場物語』(*The Story of an African Farm*, 1884)が1968年に再版されるのに際し、レスリングは「あとがき」で女性作家誕生にまつわる心理的要素を次のように述べている。

女性作家の誕生には心理的な要素が関わっているように思う。少なくともしばしば誕生を面白いものにしていく。その1つは父母の性格上のバランスであり、実践的な普通感覚をもった賢く野心的な母親と夢見がちで思想に耽る想像力豊かな父親との共同生活は一見すると、絶望的な混乱や失敗のように見えるけれど、別の次元では普通感覚や知識知恵では考えられない何らかの潜在的な可能性を秘めていることである。(172)

『父の思い出』とそれに続く『母とわたし、生意気な娘たち』を併せ読むと、レスリングの父母の夫婦関係がシュライナーの父母の場合と酷似していることが分かる。シュライナーは理解できないほど捻れた両親の夫婦関係を日々目にしながら育ち、母親との折り合いは心身症を患うほど悪かった。しかし、彼女はアフリカの大自然の美しさに癒され、小説やエッセイの執筆により自己回復する。2人の女性作家の年齢差が祖母と孫ほどあるにもかかわらず、シュライナーの複雑な家庭環境と執筆活動との関係はレスリングの場合にも当てはまるのである。想像を逞しくすれば、幼い日のレスリングは『アフリカ農場物語』を繰り返し読み、支離滅裂に感じられる家庭環境から創造

の世界へ飛翔する想像力を培ったように思われる。アフリカの大自然は2人の女性作家に「人生で本当に大切なことは富でも貧困でも快樂でも苦難でもなく、知り合った人の人格とその人とどのような関係を築くか」(184)であることを教え、家族関係における絶望的な混乱を大局的な視座から積極的に語り直す絶好の機会を与えたと言っても過言ではないのである。

『父の思い出』は父親の思い出話であると同時に、レッシング自身のアフリカへの深い思い入れをも表す優れたエッセイである。

### 『父の思い出』

父と母は、いつも愛情からか憎しみからか、度々みる夢のように必要な時にわたしの心に忍び込んでくる。でも、ふと考えると、父にとってわたしは存在したのだろうかとか問いたくなる。すでに父については何かしらのことを別の場で書いたが、それは小説や短編だったので本当のことを書かずに済んだ。今回は「真実」に向き合うことになるので、語るのが難しい。記憶にある父は、とうに全盛期を過ぎていた。

手元に父の写真が数枚ある。1914年から18年の大戦時代に撮った将校姿の写真が一番大きい。ボタン、記章、革紐、赤い襟章がついた真新しい軍服に身を包んだ黒髪の凛々しい若者は、義務だと信じることを全うするために直立不動の姿勢である。黒い瞳は揺るがず、真面目な責任感に溢れ、後年の姿を連想させる前兆はどこにもない。16歳の時の写真には、眼差しにみる意志の強さは変わらないが、黒髪の内向的な青年が写っている。均整がとれた顔のつくりの中で、上唇だけは例外的にぼつちやりと突き出している。上唇を隠すため、口ひげを生やしていたのだろう。『いまいましい唇め。こいつを何とか隠さなければ。この唇のせいでいつもいつも不愉快な思いをするんだから。』

さらに時間を遡ると、あまり美しくない太った女性の胸元を枕にし、瞳をキラキラと輝かせる赤ん坊が女性の胸元から足元まで滝のように垂れ下がったレースの中から現れる。女性の顔つきは料

理長そのもの。父は口癖のように『確かに、おふくろは実務型だったよ — 君と同じくらいに酷かった』と言い、イライラした時には母に当り散らした。祖母の傍らには、両手を下にだらりと垂らした祖父が立つというか、うな垂れていた。そう、この人物こそが人目を引く黒い眼と、長い髭が覆い隠すあの上唇の元祖だったのである。

出生証明書によると、父の生年月日は1886年8月3日。場所はダブリン協会があるウォール市S・メアリ、クレフィールド通り、ウォールトン・ヴィラ。氏名はアルフレッド・クック。父親の姓名はアルフレッド・クック・テイラー。母親の結婚前の姓名はキャロライン・クック・ベイトリー。職業(または地位)はエセックス州コルチェスター市の銀行員。

祖父母はとても貧しかった。衣服と靴の調達が大きな問題だった。それでも、「彼らなりの楽しみがあった。」書籍もあった。聖書とジョン・バニヤン作『天路歷程』の2冊のみ。日曜日の夜になると、台所のかまどの火の前で腰湯を使った。使用人はなし。日曜日の3度の教会通い。『日曜日のことを考えると、今でもぞっとするよ。馬上槍試合で槍が全速力で僕の方へ向かってくる悪夢のような1週間が心底怖かった。』幼い父は畑やあぜ道でウサギにケナガイタチをけしかけ狩りをし、鳥の巣を作り、果物を盗み、果実やキノコを取り、鍛冶屋や水車場で遊び、農耕用の馬車を乗り回した。

当時の食事は粗末だったそうだが、40代に糖尿病を患い、赤身肉とレタスだけの生活を強いられると、いろいろな料理がかつてあったことを思い出した。羊の脂肪プディング、糖みつのプディング、干しブドウと種無しブドウのプディング、焼肉と腎臓のプディング、パンとバターのプディング、肉汁ケーキ、ジャガイモのケーキ、スモモのケーキ、糖みつの米粥、フルーツ・タルトやパイ、豚の赤身肉、豚足や豚の腿肉、そして、自家製ハムとソーセージ。『そう言えば、新鮮なバターやクリームや卵もあったなあ。』このような食事のせいで糖尿病を患ったかどうかはわからないが、原因になったとしても不思議ではない、と父

は言った。

父には兄が1人いた。『鼻持ちならないほど堅苦しく賢い奴で、しかも、そのことを自負していた。頭脳明晰で、万事に付け理解が早かった。兄貴と違い、僕はいつも鈍間だった。でも、忌々しいことに、行きつく先は同じだった。』

兄弟は地元の学校へ通った。優等生の兄と比べ、弟は鈍間だと言って鞭打たれた。わたしが覚えている限り、兄弟は2人ともウェストミンスター銀行の事務員になった。管理職に出世し、自家用車やヨットさえ乗りまわすようになった「金持ちの兄貴」には、多分、行員生活が性に合っていたにちがいない。父は良心的に働いたが、仕事が全く気に入らなかった。例えば、上司が手書き文字のあら捜しをすると、一字一句もゆるがせにせず、筆跡を全面的に変えた。父の罪深い筆跡を目にしたことはないが、新たに創造された文字は入念に書かれ、先端が尖った気品のあるものだった。よく分からないけれど、これは父が「肉感的な唇」を隠したように嫌な自分を隠蔽し、新しい個性を創り出したという意味だろうか。

筆跡と同じように、父がいつ頃、何故、故郷を離れ、ルートンへ向かったかも分からない。家族との生活が窮屈だったのだろうか？ 誰にも害がない無難な推測をすると、あらゆることがあまりにも窮屈だったのだろうか。母親が現実的すぎたせいか？ 賢い兄から逃げ出さなければならなかったのだろうか？

ルートンで過ごした青春の日々は父の全盛期だった。1914年に終るまでの10年間は至福の時だった。楽しい思い出話は尽きることなく、特にダンスのような身体的歓喜を呼び覚ますものに心を奪われていた。彼と親しかった女性たちは皆「羽のように軽く、美しい踊り手」だった。ビリヤードとピンポン（両方ともその地方では一般的な娯楽だった）に興じ、泳ぎ、ボートを漕ぎ、クリケットやサッカーをし、ピクニックや競馬場へ赴き、音楽会では歌さえ歌った。母親と娘2人の家庭に入り浸ったこともあった。『息子以上の扱いだったよ。母親の方に恋しているのか、娘たちに恋しているのか、自分でも分からなかったが、好んで

そこへ行ったことは確かだ。本当に楽しかったよ。』ある若い女性と婚約し、それからしばらくして、別の女性と婚約したりもした。婚約破棄の理由は、相手の女性がレストランの給仕に対して無礼だったから。『無防備な弱い人間を侮辱するような女性とは断じて結婚できなかっただけだ。』皮肉っぽい笑みをうかべる母に向かって、父はこんなことを言った。『やっぱり、どちらの娘とも結婚しなくてよかったよ。2人とも君のようには我慢強くなかっただろうからね。』

父は亡くなる直前に、見知らぬ名前もない女性を高山の上に立つ我が家の台所で両腕に抱きしめている夢を見た。『これこそが僕の人生に欠けたことだった。昔の恋人たちに騙されて人生を見誤ってはだめだ。亡霊たちを野放しにしておく、すべのことからあらゆる色彩が消えてしまうからね。』

『しかし、あの10年間——週2,3回、ダンスをするために10マイルないし15マイルを歩いたが、それが全然苦にならなかった。当時はありとあらゆるダンスをし、野を越え山を越え、徒歩で家路に着いたものだ。月夜がきれいな晩もあったが、何と言っても、あたり一面雪に覆われ真っ白なのが最高。雪をパリパリ、シャキシャキと踏みながら歩くと、ちょうど明け方に下宿に着いた。嬉々として迎えてくれる犬に餌をやり、自分で粥と紅茶の仕度をし、食し、それから、顔を洗い、髭を剃り、仕事へ出かけたものだ。』

少年の頃の父は学校で鞭打たれ、教会へ足繁く通われ、貧困を始終恐れていたにもかかわらず、田舎の楽しい思い出話は尽きることがなかった。銀行員になった青年時代も、僅かばかりのはした金のために長時間勤務しながら、踊り、歌い、スポーツに興じ、娘たちと戯れた—この生まれつき元気な感性的な人間は、1914年、1915年、1916年の間に亡くなった。父の最良の部分はあの戦争で消え、精神は大きな障害を負ったと思う。若い頃の彼を知っている人、特に女性に会うと、彼らは異口同音に父の精神的高揚や素晴らしい活力について語る。何にもまして、人生を享受していたと言う。父の優しさ、同情心、そして、一繰り返し

聞かされるのだが一英知について聞かされる。『幼い子どもの頃でさえ、老人でさえ文句をつけ難いほど物事に精通していたよ。』病身で、怒りっぽく、放心状態に陥り易く、心気症を患った人物がこれと同一人物だとは認め難いであろう。

父は性癖の強さのために一兵卒として「入隊」した。兵隊たちが筆舌に尽し難いほど苛酷な時間を過ごしている半面、将校たちが特権を貪るは正しくないことだった。しかしながら、共同トイレ、強制的飲酒、集団による売春宿通い、そして、若い女性に関する猥褻な冗談に我慢できなかった。故に、次に将校任命命令が発令されると、それに従った。

子ども時代や青春時代の思い出は現在の記憶と同じように流動的で、時間の経過とともにその数も増すものである。しかし、父の場合、記憶は同じ口調と同じ身振り、そして、型にはまった常套句で繰り返し語られる物語のなかで凍っていた。彼の記憶の中では人々は記憶が共有された戦争でもであるかのように一般化され、名前さえなかった。父は危険地帯で1人のドイツ人に出会い、2人とも銃をゆっくり下ろし、微笑みあい、それぞれの方向へ立ち去った。兵士たちは社会の健全分子である「地の塩」であり、イギリス人兵士は世界最高だった。父はこのように強い連帯意識をかつて経験したことがなかった。残忍な将校は、出撃の際、味方に狙撃されたが、他の将校たちはこの荒っぽい正義を是認し、黙して語らなかった。また、父はベルギー南西部の激戦地モンズで守護天使を見たという人々を知っていた。彼らは軍の将軍を一同に会し、たった1日でもよいから塹壕へ放り込み、兵卒がどのようなことを耐え忍んでいるかを実地検分させれば—それで戦争はすぐにも終わると考えていた。

記憶、夢、さらにもっと深い深層部を個人的な暗い感情が流れていた。運命に支配された父の暗い部分には恐怖心しかなく、それは言葉にならず、短く苦い感嘆、あるいは、怒り、疑心、裏切りの言葉でしか表現されなかった。大戦で戦った男たちは、この戦争が最後の戦争だと信じて疑わなかった。父もその1人だった。故に、祖国への篤

い信頼と苦勞知らずの指導者たちに対する憤怒との折り合いをつけることができなかったのである。歳をとり、病気が悪化するにつれ、怒りと裏切られたと言う思いはますます強くなった。

1914年当時、純真無垢な父はベルギーにおけるドイツ軍の残虐行為に怒り狂い、苛酷を承知のうで理想主義的な正義感から志願した。占い師が語った予言を鵜呑みにした父は、自身の運命を悟っていた。(彼は迷信に無批判か、あるいは、心的な才能に恵まれていたとも言える。)2度も大きな危険に遭遇したが、結局のところ、死ななかった—先祖である有名な兵士に守られていたから。『親しい叔母たちから後に聞いたところでは、僕たち一族は、教会の記録によると、ウェリントン公爵の落し胤の末裔だそうだ。モルバラ公爵だったかもしれない。残念ながら、どちらか忘れてしまったが。いずれにせよ、占い師から偉大な軍人の1人が戦闘中ずっと傍らにいらっしゃるでしょうと告げられたのだ。』(父はこのような守護神だけでなく、テイラー家の精霊を頼み、ユグノーの子孫であることに対してもロマンチックな思いを抱いていた。そのうえ、血液の中を流れる大叔父から受け継いだ「野生の血」も信じていた。この大叔父は密輸の罪で不当に投獄され、10年の刑を終え出所すると、亡くなるまでコンウォール海岸で極めて効率的に金儲けに励んだそうだ。)

父に偶然起こった最も幸運なことは、彼自身が語ったところによると、パッセンダーレが激戦地になる10日ほど前に榴散弾により片脚が粉碎したことだった。その日、彼の所属軍隊は全滅した。すでに分かっていたことだが、彼は占い師の予言どおり負傷した。『占い師の言葉の意味は全然理解できなかったが、塹壕の中で2度不思議な経験をした。最初は盲腸が破裂し、危うく命を落とすところだった。2回目はパッセンダーレ戦が始まる前の数日間、黒色の分厚いベルベットの棺に静かに納まっているような気がしたものだ。感じたことを言葉にすることはできないが、それはひどく辛く、2回目の時はあまりに酷いので、自分はもうすぐ戦死するだろうと知り合いに手紙を書いたほどだった。』

脚は腿の半ばで切断、そして、シェルショック。父は何ヶ月もの間病床にあり、その後も鬱病を患った。『忘れてはいけないよ。人間は皆、時として水面下で煮えたるものだという。戦うべき相手がいかに恐ろしいかをまだ知らないだろうがね。でも、まあ、眼を見れば分かるだろう…片脚を失った後はこんな状態が長く続き、評判の良い医者のところへ行行った。気が狂いそうだとすると、人間誰しもそんな悩みを抱えているから、心配しなくてもよいとの答えが返ってきた。分からないだろうが——それはひどく酷く恐ろしいことだった。自分自身が恐ろしく、頻繁に見る夢も怖かった。もう昔の自分ではなかったのだ。』

王立自由病院には後にわたしの母となるシスター・マックヴィーフがいた。父は看護婦と結婚した。父母は2人ともお似合いの夫婦だと幾度も繰り返して語った（勿論、2人の声の調子は全く異なったが。）1919年。塹壕を経験した後、イングランドで銀行員として勤めることは出来ない、と父は断言した。イングランドは因習的で偏狭すぎた。そのうえ、民間人は兵士たちが何を経験したか知らなかったし、知りたくもない様子だった。「大いなる沈黙」を忘れないようにする手立ては何もとられなかった。そこで、父はペルシャの帝国銀行へ赴任し、そして、わたしが生まれた。

家屋は美しかった。沢山ある部屋の床は立派な石造り、天井は高く、窓からは雪が筋状に積もった山々が見渡せた。庭にはバラやジャスミンが咲き乱れ、ザクロや胡桃の木も植えられていた。父はケルマンシャーのことを好ましく思っていたが、まもなく、テヘランへ転勤になった。テヘランには「大使館関係者」が数多く溢れており、社交的な母が社交生活を満喫した反面、父は後で思い出しても腹を立てるほどイライラしていた。

焦燥感—この兆候はペルシャで最初に表れた。父は「汚職と墮落」を嫌った。話し辛いことをここで語ることにする——人間的な良い資質は悪い資質、悪質でなくても危険な要素にもなるのである。

父は非常に誇り高かった——その言葉の意味をいつも正確に知っていた。つまり、高潔だった。

子どもの頃、『人間はそんなことをしないものだ』とか、『ダメだ』とか、『それは間違いだ』とか、父が言い出すと、それは私たち家族への最後通牒だった。父がペルシャを去った本当の理由はかの地の「墮落」だったと今も確信している。しかし、父はあの頃すでに無意識下でもっと自由な何かを希求していたのだろう。なぜなら、銀行員生活は拘束が多く、彼の到来をじっと待ち構えている夢の世界への自由な飛翔を不可能にしたからだった。後に、ローデシアでも彼の優れた資質の故に、不幸は重なった。誠実さと品位の名のもとに、父は家運の斜陽を防ぐ手立てを全く取らなかった。

1925年、わたしたちはペルシャを去った。その年、ロンドンで開催された帝国博覧会の南ローデシア部門ではとても素敵なおウモロコシの穂が展示されていた。ポスターには1袋25ポンドのおウモロコシがあれば大金持ちになれると派手な謳い文句があった。そこで、父は衝動的にオリエントの「墮落」から足を洗うつもりで、800ポンド（全財産だったと思う）をかき集めた。他方、母は有名百貨店を巡り、リパティでカーテン、ハロッズで衣服、訪問カード、ピアノ、ペルシャ絨毯を買い揃え、家庭教師と幼い子ども2人をも荷造りした。

しばらくすると、父は小丘の天辺に藁と泥でできた葉巻形の家を建て、そこに住むようになった。四方八方どちら向いても、山や川や谷等々の神の偉大な創造物が見渡せ、頭上には東の端から西の水平線まで視界を遮るものが全く何もない大空が広がっていた。そこはザンベジ川から南へ200マイル、モザンビークから100マイルほど離れたトランスヴァール地域のバンケットに位置していた。この名前の由縁は、この地の鉱脈がランドの含金礫岩層（バンケット）と同じ構造だったからである。ロマガンディ——黄金の国、タバコの国、トウモロコシの国——は野生のまま、人間はほとんどいなかった（アフリカ人はすでに特別保留地へ追放されていた。）隣家とは4、5マイルから7マイルも離れていた。玄関先には…人も、物もなかった。農場はなく、野生の茂みと2本の川だけがあった。7マイル離れた山地まで

囲いさえなかった。山の尾根の反対側にもポルトガルとの国境まで未開墾地が延々と広がっていたので、「イギリスの若者たち」は薬の密売等々の罪で警察のお尋ね者になると、国境を越えた。

その後、どうなったのか。不運の連続だった。例えば、トウモロコシの価格は1袋25ポンドから9ポンドに急落した。悪天候、価格安、不作。こうなると、農場の売却は母が切実に望み、父もそれに同意したにもかかわらず、実現不可能になった。父は南ローデシアを不条理な国だと言っていた。農場を長期間「所有」するからくりは、土地をすべて担保として、国営ランド銀行からの融資金で運営される農場では、50人のアフリカ人を1カ月間、1日分の仕事さえ出来ないにもかかわらず、12ポンドで雇うことだった。もう！

ヨーロッパからやって来た農夫の場合、2人いれば1日で終わる仕事を無知な黒人の野蛮人なら、たとえ20人いたとしても1週間かかっただろう。(それにもかかわらず、父は雇い主であることと「公正な取引」に誇りをもっていた。)事態はさらに悪化した。かつて、占い師は父の前途に横たわる不幸を思うと心が痛むと言ったが、これこそがまさに不幸だった。

悲惨だったのは父でなく、母だった。神経症は自身がおかれた状況に対する抗議であるが、この病気を患った後、母は勇敢かつ機略縦横な女性に変貌した。しかしながら、夫が現実世界から遊離し、彼女の常識を食い物にしていたとは夢想だにできなかった。2人は終始農場を「売却」するつもりだった。だが、それは神業だった——宝くじに当たるとか、金鉱を発見するとか、遺産を相続するとか。それから、どうするの？ なんて馬鹿な質問！ 分かりきっているでしょう。音楽の夕べに来客を招き、観劇の後、トロカデロという有名なレストランで素敵なパーティを開き、普通の生活をおくるために、いざイングランドへ。可哀想な母。農場にいた20年間、母は自身と子ども2人の普通の人生が始まる時をひたすら待っていた。母親の災難が子どもたちの天恵であるとも知らずに。

父はこの間衰え続け、61歳で生涯を閉じた。

すべてが変貌した。伊達者で潔癖だった父は、今やみずぼらしいカーキ色の服を着代えることさえ嫌がった。社交的だった父は人間嫌いになった。身体的疾患——ほどなくして糖尿病や内臓疾患をも患う——に全面降伏したのである。かつて木製の義足を自慢し、鉱山の立坑を登り降りし、義足をつけたまま木登りさえしたが、今や満足に歩けず、義足に閉口していた。髪は急に白くなり、昼間の睡眠が増し、夜の半分は目覚め、あれこれ物思いに耽った。

金鉱探しに思いをはせていたはずだ。10年間、金属間の引力・反発について単独で理論を見つけ、それを検証するために実験した。全精力を注いだにもかかわらず、彼の理論が間違っていたか、あるいは、不運のせい、成功しなかった——いずれにしろ、鉱山を発見したなら、農場から離れなければならなかった。地球と月の鉱物の関係性について瞑想し、農場にある植物をすべて混ぜ合わせ、科学的好奇心から自身でそれを飲んだことさえあった。イギリス政府は愚かしく、ドイツとロシアが共謀して反キリスト教同盟を締結することに全く気付かないなんて、怪しからん。…チャーチルの発言に誰も耳を傾けないから、戦争は避けられない。が、しかし、神は世界を支配するのがイギリスだと定めているので安心だ(父はこの頃イギリス人がイスラエルの失われた10支族の子孫であると提唱する宗教団体に入会していた。)彼らの予言によると、1000万人の死者がエルサレムを取り囲むという——では、大量の死体処理はどうするのか。鞭打ちの刑廃止を望む人々は、殴打のことなら土着民も理解できるので、逆に彼ら自身が鞭打ちの刑に服するべきだ。旧約聖書にも『目には目を、歯には歯を・・・』とあるではないか。絞首刑を廃止するべきではない。

父の陰鬱な性格はこの頃一層暗くなり、暴力や病気や戦争のことしか考えられないようだったが、彼の面前で不人情なことを言ったり、噂話をする人はいなかった。他人、特に女性に対する非難を聞くと以前にもまして不機嫌になり、最後には『いいじゃないか。他人についてとやかく言う権利は誰にもない』と、爆発した。

アフリカでは太陽が沈むと、星が昇り、すべての星は想定される行程を光り輝きながら動く。雨季には空がピカッと光り、雷鳴がとどろき、乾季には夜の壮大な暗闇が焼畑の火で照らされ、赤い炎が9月から10月にかけて山並みを鎖状に走った。父は夜になると椅子を屋外へ持ち出し、タバコをふかしながら、大空と山並みを静かに眺めた。満天の星を見上げる身も心もぼろぼろに傷ついた父。『こうしていると、ふと考えるのだ——天空にこんなにも多くの世界があるのだから、僕たちがいつ爆発しても問題なしではないか——僕たちは一体どこから来たのだろうか。』

父が以前から予知していた第2次世界大戦勃発の時期は辛かった。海軍へ入隊した息子は危険と隣り合わせ、娘は嘆きの種。病気は最悪。昏睡状態か、昏睡状態に陥りかけた父を自動車の後部座席に乗せ、ソールズベリーへ直行することが頻繁になった。母が病院近くの小綺麗な郊外の家へ父を住ませると、父は寝込んでしまい、2年後に死亡した。薬の影響でほとんどの間意識はなかった。意識が戻ると、異常なほど「あの戦争」について(ひどく痛む箇所を舌で舐めながら)語った。そうでなければ、青春時代について語った。『夢を見ていたよ——ああ、神様、馬たちが首を真っ直ぐに伸ばし疾走し、騎手の制服には太陽が燦燦

と当たり、観衆が熱狂している……夢を見ていたよ、太陽が昇る頃、霧の中を散歩していた、川辺を……神様、神様、ああ神様、いつの頃だったのか、あの戦争の前は本当に良かった。』

テキストには Doris Lessing “My Father” *A Small Personal Voice*. Ed. Paul Schlueter (London: Flamingo, 1994) を使用。引用末尾の( )内の数字は掲載ページ数を表す。尚、文中の邦訳はすべて筆者による。

#### 引用文献

- Howe, Florence. “A Talk with Doris Lessing” *A Small Personal Voice*. Ed. Schlueter, Paul. 1966; London: Flamingo, 1994.
- Lessing, Doris. “Afterword to The Story of an African Farm” *A Small Personal Voice*. Ed. Schlueter, Paul. 1968; London: Flamingo, 1994.
- . “My Father” *A Small Personal Voice*. Ed. Schlueter, Paul. 1963; London: Flamingo, 1994.
- Woolf, Virginia. *The Diary of Virginia Woolf: Volume I: 1915-1919*. Ed. Anne Olivier Bell. London: The Hogarth Press, 1983.
- レマルク, エーリッヒ・マリア『西部戦線異状なし』泰豊吉訳, 新潮文庫, 1955年。
- 河内恵子編著『西部戦線異常あり』慶応義塾大学出版, 2011年。

A Japanese Translation and Interpretation  
of “My Father”  
by Doris Lessing

MATSUMURA Toyoko

**Abstract**

“My Father” was published in 1963, while Doris Lessing was becoming well-known as the best feminist writer of *The Golden Notebook* at the rise of early 1960s feminist movements in the world. She had not written any essays about her own family life until then. Short as it is, it is a curiously interesting essay on her stricken father and her own early life in South Africa; it reveals the creation of a woman novelist who is deeply concerned with the long history of the British rule in the marginal colony.

After going to the battle front of World War I as an idealistic officer and coming back without one leg, the father immigrated to colonies such as Persia and South Africa. In Africa he led a poorer life as a landowner and suffers various illnesses until death, involving his wife and children in a series of financial troubles and illnesses. It is natural that the reader imagines such a family life gloomy and miserable. To our surprise, however, Lessing never complains of his utter mismanagement of the farm, but depicts him as a deluded, lovable and struggling victim of the World War I and the British imperial politics of those days. His deeply rooted racial prejudice and ardent nationalism is so strikingly parallel with the natural beauty and great potentialities of the unknown Africa that the essay can be read as a kind of amazing epic story.

The aim of translating “My Father” into Japanese is that Lessing the woman and the pacifist as opposed to the communist feminist should be more widely known in Japan.